

Susan GlasPell's "The Outside"(A Translation)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山名, 章二 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/3942

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



スーザン・グラスペル作「外側」*（翻訳）

山 名 章 二

登場人物

隊長（海難救援隊長）

ブラッドフォード（海難救援隊員）

トニー（海難救援隊員、ポルトガル系）

パトリック夫人（人気のない元海難救援所の住人）

アリー・メイヨ（夫人の使用人）

場面：元海難救援所の一室。その後、廃屋だという他に、これといって新しい特色はない。救難所の定番である灰色に塗られてはいるが、救難所特有のきびきびしたところがない。部屋は大型ボート置き場の一角で、天井から大型ボートが下げられていた枠組が見える。奥の壁は3分の2ほど開け放たれているが、納屋によくあるタイプの大きな引き戸だからである。この戸口をとおして砂丘のつらなりと、砂丘の向こうには森が見える。森と砂丘の境い目のところがはっきりと見分けられ、森の砂丘側にできる蔓や灌木が際立って見える。砂の中で生きながらえるものなど他にはない。森が砂丘に脅かされているところが何か所がある。救難所は岸が曲線になったあたりにあり、戸口からは海も見える。（救難所はコッド岬の外海側、岬の外れに近く、岬が最後の曲線を描き、プロヴィンスタウン湾になっているあたりにある。）砂丘は砂が盛り上がった、奇妙な形になってできており、所々に、したたかな浜辺の雑草が生えている——死闘であり、万難を排した生への執着である。大きな引き戸の下手側に砂の吹きだまりがあり、砂に埋まった浜辺の雑草が葉先をのぞかせている。上手にも戸口があり、また、大引き戸の下手は傾いた壁になっている。幕が上がると、この壁にある戸口は開け放たれていて、救難隊員のブラッドフォードとトニーが男の上にかがみ込み、蘇生を試みている。隊長が大戸の外、上手よりに姿を現す。急いで来た様子で、覗き込み、男たちの姿を認め、足早に近づく。

隊長：どきな、俺がやってみよう。

ブラッドフォード：やってみるまでもねえです、隊長。引き上げたときにやあ、もう死んでたしね。

隊長：ダニー・シアーズも引き上げたときにやあ死んでたんだ。でも、みんなで助けたんだ。少し続けてみる。

（かがみ込んでいた男たちは立ち、伸びをすると、部屋に入ってくる。）

ブラッドフォード：（胸を張って伸びをし、胸に両手を当てながら） 難儀だよな、死人を生き還らそうってのはよ。

隊長：どのへんで見つけたんだ、ジョー？

ブラッドフォード：ここの真ん前。40 フィートも入らねえあたりに浸かってたんでさ。

隊長：ここへ担ぎこんだわけは？

（心ここにないかのような口調、かがみ込んでくぐもった声音である。）

ブラッドフォード：（きまり悪げに声を立てて小さく笑いながら）癖ってやつですかね。ずいぶんなん人も担ぎ上げたからね。（部屋を見回す）それに、浸かっていたあたり、ひでえ様子でね、風でしぶきが吹き付けやがって、やっこさん^{おか}陸に上がったのもわからねえような始末だったですぜ。

トニー：俺が見張りの当番からの帰りがおそくも早くもねえでよかった。

ブラッドフォード：そうとも、トニー、おめえは融通が利く。遅くもねえ、早くもねえ。ポルトガルの連中じゃあ珍しいよな。でも、その海にしてから（と隊長に呼びかける）ここの女衆とならべりゃあ猫の子見てえにおとなしいですぜ。アリー・メイヨーがよ——いや二人とも気がふれてるんだよ——（大きな引き戸を頭で示しながら）戸を開けっ放しにして、掃き出してたんだ、人が通りかかれば、後じさりして、立ったまま見てるだけなんだ、いつもよ——全く、どうかよそへでもかついで行きたかったぜ。それで、（隊長が男の上にかがみ込んでいる部屋の方を勢いよく手で示しながら）俺がこの戸を足で蹴って開けてよ、やっこさんを連れ込んだってわけよ。（声をひそめて）その気があったってよ、やっこさん、アリーの顔を見たら、生きけるなあよしといただろうよな。（いくぶん愛想よく）俺ならごめんだったね。

隊長：身元はわかってんのか、ジョー？

ブラッドフォード：見かけたことがねえ顔だね。

隊長：平底が一艘打ち寄せられたって、ハイ・ヘッドのミッチェルから電話があったがね。

ブラッドフォード：夕べは平底で海に出るような晩じゃあなかったよ。(トニーに、自慢げに)俺なら、平底でもしのげなかったってこたあねえけどな。できる者もいるし、できねえ者もいる、ってことよ。(間仕切り壁の戸口に近寄り)そいつは死んじまってまさあ、隊長。

隊長：なら、俺はなにも悪いこたあしてねえってことだな。

ブラッドフォード：(その場を離れ、昔大型ボートが吊るされていた桟を揺らしながら)ここに入ったのは今度が初めて、か、トニー？

トニー：めえに来たこたあなかった。

ブラッドフォード：それが、俺はあるんだよ。(笑い声をたてる)あのとつぁんだけだよ、(隊長の方へうなずきながら)ここに27年も住んでたんだ。まったく、いろいろあったよな。あそこから運び込まれた死人が何人もいた。(と、外への戸口をさしながら)俺が担ぎ込んだ仏もな、ほんとに。ビル・コリンズ、それにルー・ハーヴィーもだ、それから——なんてこったい！もうなんもかもおしめえだ。難破あ見たこたあねえよな、おめえは。ねえと思う。俺はジェニー・スノウ号が海に出てた晩に詰めてたんだ。(海を指差しながら)難破があってな。(また桟組みを揺らしながら)ここにあった大型ボートをよ、あそこの土手をおろしたんだ。(戸口にいき、外を見やる)まったく、よくもおろせたもんだ。砂が動くせいだよ、隊長のとつぁんが住んでたこの家もすっかり土手の縁になっちまった。そんなわけで、救難所の役に立たなくなっちまうと、夏の間住もうって女が出てくる——冬になっても居続ける、ってわけだ。めげねえお人よ。

トニー：女の人、がいるときれいになるもんだけどな。この家にゃあ女の人住んでる様子がねえ。床にもなにもねえし——壁にもなにもねえ。なんもかも——(と両手を使って表現しようとする)むき出しだしね。

ブラッドフォード：(トニーの身振りをまねて)そうだな——なんもかもむき出しだ。俺に言わせりゃあ、あの女は気がふれてるね——あっちの砂の上にじっと座ってたりしてよ——(砂丘の方へ身振りをして)なにい見てるんだか？見るものもねえってのによ。それに、使用人だっておんなじだ、アリー・メイヨーだがよ。地元の出なんだ。昔はまともだったんだけど

よ——

(パトリック夫人が下手の廊下から登場。「町」の、洗練された女性だが、砂丘と緑地ぐらいかけ離れた暮らしにはまり込んでしまっている。今の今は、興奮し憤慨している。)

パトリック夫人：あなたがた、不法侵入よ。救難所ではないのよ、もう。前そうだったからって——なぜ、そう考えるのかしら——これは私の家なんです！ だから——自分の家は人に使われたくないんです！

隊長：(戸口から頭を突き出して。取り組んでいる男の片腕が持ち上げられ、手が戸口を抜けて伸びている) そうさな、奥さん、海が男を送り込んできちまえば、どこの家も救難所になるもんだ、と思うがね。

パトリック夫人：(手を見ないですむように背を向けているが) そんな人ごめんですわ！ だって(開き直るが、声をつまらせている) 私の家なんですよ、自分のものにしなくちゃあならないんです！

隊長：この人の命がつかたって納得がいったら、家はお返ししますよ。ほんとに何人もの命がここで救われてきたんですよ、パトリックさん——だったよね——だから、もう一人あの世から連れ戻せるとなれば、家があんだものだからって、私にゃあまったく関係ないですよ。

パトリック夫人：(か細いが、とりみだした言い方で) どうあろうとも私の家は私のものです。

隊長：そんな女、くそくらえてんだ！

(男の体を動かし、ドアを乱暴に閉める。隊長が「だから、もう一人あの世から連れ戻せるとなれば」といっている間に、アリー・メイヨーが開け放され砂丘を見渡せる戸口の外に姿を現している。寒々とした女性で、はじめは、背景の砂の一部でしかないように見える。しかし、口論に耳を澄ましている様子には、場違いなところでいじけながらも命をつなぐ生き物がもつような激しさが感じられる。)

パトリック夫人：そんな、そんなものお断りよ！ ほんとうに——

(しかし、にかわに後じさりをする、姿を消してしまう。)

ブラッドフォード：まあ、なんだね、アリー・メイヨー、あんたの奥さんはあんまり優しいお方とは言えねえな。一体どうしたって言うんだ。人に死んでもらいてえのか？ 人の命を助けようとしてるのを見るとすっかり参っちゃうって風だな。なにもそんな偏屈に雇われることもねえじゃねえか。変人——俺に言わせりゃ、そんなところだね。くる日も来る日も、あっちの砂丘と森の境い目ところに座ってんのをしてるんだ。座って、見てるだけなんだ。(突然思い当たって) 砂が崩れて森が埋まってくのを見るのが好きなんだな。なにかが埋まるのを見るとうれしいんだろうな。

(アリー・メイヨーは戸口の中に入り、部屋を半分横切り、下手の廊下の方へ移動していたが、この最後の台詞を聞くと、立ち止まり、何かを見通している様子でしばらく立ち尽くすが、ゆっくりと移動し、出て行く。)

ブラッドフォード：コーヒーが出てくるといいんだがな。でもよ、この家で、コーヒーが出るか？ そりゃ、無理だ。休まるものもいるってのによ。(隊長が勢いよく閉めた戸を開けながら) 手伝おうかね？

隊長：いや。

ブラッドフォード：そいつは、死んじまってますよ、隊長。

隊長：(うなり声で) ダニー・シアーズも死んじまってたんだぞ。そこを閉めろ。二度とあのあまの声を聞きたくねえからな、もう。

(戸を閉め、大きな引き戸と隊長がいる部屋との間の角に造り付けられたベンチに座りながら)

ブラッドフォード：陽気な二人組だよな——こんな陽気な家に住んでよ——救命隊員がとられて、砂に返した家だぜ、なんてこった！ パトリックのかみさんもあれで昔やあまともだった。亭主と一緒に、避暑で町に来てたんだ。出かけてきちゃあ、外っ側でピクニックしてたもんだ。ジョー・ドワイヤーだったな、避暑の連中といっつも口きいてるんだよ、救難所を

新築する計画があつて、こっちのは入札で売りに出るって教えてやったのよ。話し合っているのを耳にしたんだ。ちょうど浜のあの辺に座ってよ、夕飯食つた。暖炉を入れる、暖炉は派手な色でなん色かに塗り分ける、みんなを呼んでパーティーだのなんだの、避暑の連中の考えそうなことだったな。落札したのよ——ほしがる者がいるかってんだ——砂に埋まっちゃって、梃でも動かねえ家なんぞ。

トニー：派手な塗料なんぞどこにも塗られてねえぞ。

ブラッドフォード：見えねえ、そうか？ たまげるじゃねえか。おめえ、色盲じゃねえか。俺たちが最初の客ってことか。(と言って笑う) 先の11月のいつだったか、ビル・ジョウゼフの乾物店にいたらよ、奥様ご登場、ニューヨークのパトリック夫人だとよ。「海難救援所あとに入居します」ときた、「今夜はあちらに泊まります」だと、まったく。ビルもよ、素っ頓狂なやり口にあなれっこだ、避暑の連中相手が商売だからな、でもよ、これには不意をくらったね。11月、空き家、砂に埋まっちゃった家って言ったっていいよな、町から離れててよ、おまけに外側だ——砂丘をずうっと歩いた先、人っ子一人、獣一匹もいねえとくらあ。ビリーが感づいたんだ、言ってることじゃねえ、あいつの言うことをきいたかみさんの様子でよ、亭主が死んで、かみさんは隠れようと逃げてきたんだってな。そりゃあ、だれだって気の毒に思うよな、あんなにお高くとまっていたり、えらく人が悪くなきゃよ。けどよ、人の悪りい連中はやりてえほうでえなんだ。仰せの通り、その晩はおとまり遊ばしたってわけよ。ビルは人夫を手配して暗くなるまで荷物を運ばせたんだ——ベッド、ストーブ、石炭。おまけに、女中をご所望だ。「よけいなことは一言も言わない人」だとよ。それで、ビルが店の裏にきたんで、言ってやったのよ、「アリー・メイヨーがうってつけだと思うがね」ってな。アリーは口をきくのに恨みでもあるんだろうな、でなけりゃ、えらく大事なもんだから、後々のためにとってるんだろうよ。もう20年もよけいなことは一言も言ってねえからな。わけはいろいろあるんだろうよ。亭主を海に出してる女はいつもおしゃべりしてるわけにはいかねえもんだ。

(隊長が出てくる。後ろに戸を閉め、戸口に立ちつくす。疲れて、落胆した様子。二人は彼を見やる。間。)

隊長：誰だったのかな。

ブラッドフォード：若えしな。てえして海にも出てねえようだ。

隊長：助けられねえ時も、ここにおいてくのは気が進まねえ。ま、すぐに引き取りに戻れるがな。(あたりを見渡す) 前は、もっと居心地がよかったな。(外の戸口に移動するが、このまま出て行くのに気がさして、ためらう) ジョーよ、ここでずいぶん何人も助けたな。

ブラッドフォード：ダニー・シアーズはボストンでバーテンやってるしな。

(三人は出て行く；砂の吹きだまりをよけて歩いているとき、アリー・メイヨーがコーヒーポットを持って登場する；男たちが出て行くのを見、コーヒーポットをおき、隊長が閉めた戸口に目をやる。引き寄せられるように、戸口に移動する。パトリック夫人が後について登場する。)

パトリック夫人：帰ったの？

(メイヨー夫人、閉じられたドアに向かい合ったまま、うなづく。)

パトリック夫人：おまけにおいてくってわけ——なの？ (相手はまたうなづく。) ということは？ (メイヨー夫人は立ち尽くすだけである。) なんの権利もないのに——昔、救難所だったからって——！ **自分の家なんだから自分だけでいたいよ！**

(コートとスカーフを壁のかけからひったくると、大きな戸口から砂丘に向かって出て行きかける。)

アリー・メイヨー：待って。

(言い終わると、角のベンチに座り込む——自分がしたことに圧倒されている風情である。相手は引き止められている。)

アリー・メイヨー：(独りごちる) あれだけ言えたんだから、もっと言える。

(呼び止めた相手に目を向け、しかし、ことばは独り言で) 中の若い人が——顔つきが——わからせてくれたことがある——(片方の掌を開き、胸に当てながら。しかし、先を続けられないかのように、待つ。ことばが出たときも、やっとなのである——ゆっくりと、単調で、あたかも無言の年月に閉じ込められたかのようなのである) 20年間も、私のしてきたことは今あなたがしていることだ。だから言えるのだけれど、それは間違いだわ。(声はささやきになってしまっている。言いよどみ、なにか遠い、紗幕のかかったものに視線を馳せながら) 結婚して、2年になっていた。(急な痛みがさしたかのように、ギクッとする。繰り返す、強いて自分に言わせるかのように) 結婚して、2年が経っていた。あの人は捕鯨船で北に出て行けることになった。世の中、きつかった。行くしかなかった。1年半——の予定だった。1年半。結婚して2年になっていた。

(座ったまま黙りこみ、前後に体を揺すっている。)

あの人が出て行った日。(ことばというよりは、痛みからはきだされる) あの人がいってしまった後の日々。

はじめは便りがあった。最後の便りにはもっと北へむかうと書かれていた——帰途につくまでは便りをかく暇もない、と。(待つ)

6ヶ月がすぎた。もう6ヶ月がすぎ、便りはなかった。(長く待つ) 誰にも便りがなかった。(つかえてしまい、続けないだろうと思われた後) プロヴィンスタウンの誰にもまけないくらいおしゃべりだった。ジムが私のおしゃべりをからかったものだった。でも、みんなが話をしに来てくれた。言うのよ、「便りが来るわよ」って。ああに違いない、こうに違いないって、話してくれたものだった。そして、生まれてからずっと友達だった子が言った——「ひょっこりと帰ってくるとしたらどう!」 私、立ち上がって、台所から追い払ってやった——それから今の今までずっと、言わないでよいことは一言も言わないできた。(このことを語るのにほとんど抑えが利かない様子である。それもおさまる。ささやき声で) ジムを閉じ込めた氷が——私を閉じ込めたのよ。(氷に閉ざされたかのような間。回復する。

パトリック夫人に向かってこだわりなく) それは間違いよ。(突然の変化)
夫に死なれた女はあなただけじゃないのよ!

パトリック夫人:(傷つけられたものの叫びをあげて) 死んだですって?

主人は死んでなんかいないのよ。

アリー・メイヨー:死んでない? (ゆっくりと理解する) そう, なの。

(戸口の女性は泣いている。床に落ちていたコートを突然拾い上げると外に出る。)

アリー・メイヨー:(そうすることができないほどの様子で) 待って。

パトリック夫人:待て, ですって? 言いたいことはもうないでしょう?

よけいなことは言わないってきかされていたわ。

アリー・メイヨー:言わないわ。

パトリック夫人:それに, 知りもしないことに鼻を突っ込んでしまったのがわかるんじゃないかって。

(そう言いながら, また, 息を殺してなきながら, 戸口の傍らの砂を半分砂に埋まった雑草の上に押し出す, が知りながらそうしている様子ではない。)

アリー・メイヨー:(ゆっくりとした口調で) 20年も黙っているとね, いろいろなことがわかるのよ——知っていることさえ知らなかったことがね。あなたがなぜそんなことをしているのもわかっているわ。(相手を見上げる。驚いた口調で) 埋めないで, 生きる気持ちがあるものは他にないんだから。育つに任せなさい。

(相手は外で息を殺してなき続けているが, にわかに踵を返すと, 砂丘と森の境目に向かって歩み始める。)

アリー・メイヨー:どこに行くのかわかってるわよ! (パトリック夫人は振り向く, がそうしたくない様子である) なにをしようとするかもね。あ

そこに行って。(木々を指差しながら) 埋めるのよね。自分の命を。埋めるのよ——砂が森を埋めつくすのを見ながらね。でもね、言いたいことがあるのよ！ 闘うもののよ。森の木は！ あそこで隊長が息を吹き返させようががんばったように、生き続けようと闘っているのよ、木がね！

(と言いながら、閉じられたドアを指差す。)

パトリック夫人：(奇妙な高揚感をこめて) そして、同じように負けるんだわ！

アリー・メイヨー：(確信を持って、暗い口調で) 負けることなどないのよ。

パトリック夫人：負けない、って？ (勝ち誇って) 砂に埋もれた木々の先を歩いてきたんだわ。

アリー・メイヨー：(ゆっくりと、暗く、しかし、ゆったりとした口調で) 砂が木々を覆うと、蔦がその砂にかぶさり、おさえるのよ。それだけじゃない、別の木がのびて、埋められた木を超えていくのよ。

パトリック夫人：砂が崩れていちばん遠くまでのびる蔦を埋めるのも見たわ。

アリー・メイヨー：別の蔦がそこまでのびてくるのよ。(声をひそめて、優しく) 遠くまで、遠くまでのびる不思議な、かわいい生きものたち！

パトリック夫人：なによりも先に埋められてしまうだけだわ！

アリー・メイヨー：そして、後から続くもののために砂をおさえるのよ。そんな小さなものが森を守り、森が町を守っているのよ。

パトリック夫人：町を守る森なんてどうでもいいわ。ここは外海側よ、浜辺の草しか生えないこんな砂丘、人は住めないこんな外の浜なんか。外側、よね。ここで生まれて、ここで死ぬあんたがたがそう名付けたんだわ。

アリー・メイヨー：そう、そのとおり、だけど、そう名付けたにはちゃんと訳があるのよ。あの人はここにかつぎこまれてから死んだ (と閉じたドアに向かって手を差し出す)、そのまえにも、なん人も男たちが、ね。しかし、同じくらいなん人も男たちは港にたどり着いたのよ！ (腕を上げ、曲げると、ケープ・コッドの形にする。曲げられた腕の外側に触る。) 外側、よ。だけど、腕が曲がって港になる、港では男たちが安んじていられる。

パトリック夫人：私がいるのは港の外だわ——砂丘だわ、命とは縁のない陸^{おか}よ。

アリー・メイヨー：砂丘が森にぶつかる、森は砂丘を町から遠ざけている、おかげで町は港の浜になっていられる。

パトリック夫人：ここは外側だわ。(砂を手につく、浜の雑草にこぼしながら) 砂よね、覆う砂、動いて覆いつぶす砂の小山。

アリー・メイヨー：森よ。砂丘がプロヴィンスタウンの町に押し寄せる、その砂丘に立ちはだかる森。沖にいたら命が危ないときに、男たちが向かうところ、それがプロヴィンスタウン。空が暗くなっていくつもの帆がこの辺りに帰ってくるのを見たことある？ 一列になって、港へ急ぐ帆を、子供たちが待っている港へ。戻るのよ！（指差しながら）森の縁に、砂丘の縁でもある、あなたの森の縁に。

パトリック夫人：命の縁よね。そこまで行くと、命がちじこまって、名もつけてもらえないいいじけた姿になってしまうんだわ。

(突然戸口に座り込む。)

アリー・メイヨー：たしかに名もつけてもらえない。だけど——外側に立ち向かっているのよ！

(命の脅威にうたれて)

パトリック夫人：(砂をつく、地面にこぼしながら) 砂がそうさせてくれるものにしかねない。風に吹かれた砂のような形、奇妙な形しか持てないんだわ。

アリー・メイヨー：外側に立ち向かっている。(近づきながら、親しみを込めて) ここへ来たわけは知っているよ。こんな放り出された家、生きようとする者と言えば救命隊の男たちだけの浜へさ。わかっているんだ、あんたをこんな砂丘に引き留めているもの、あそこへ引きよせるものも、ね。でもね、見たいものとならんで、まぎれもないほんとうのことが他にもいろいろあるんだよ。

パトリック夫人：そんなことどうして判ると言うの？ 20年間どこにい

たって言うのよ。

アリー・メイヨー：外っ側よ。そう、20年の間。だからこそ、どれほど勇敢なのかわかるのよ（と、森の縁を指し示す。突然口調をかえて）あそこにはもう二度と平穏などみつからないからね！ 行って、闘うのを見据えるんだね！

パトリック夫人：（素早く立ち上がりながら）残酷な女——酷薄で、傲慢な女だわ！ 自分のしていることぐらいわかっていたわ！ お前なんかになにがわかるものか！ この私のことが！ 私は外っ側へ行っただけじゃあないわ。置き去りにされただけ。がんばるだけ、なんとかきりぬけようと。私を痛めつけるものは、なにもかも、埋まってしまうて欲しいの、深あくうめられて、ね。もう春だわ。今朝、わかったの。嵐をきり抜けて、私をとらえ、とらえて痛めつける春がやってくるのが。だからこそ、耐えられないのよ——（閉じられた戸口に目をやる）この私に感じる力があると認めさせたあのこと、このことが。長いこと感じたこともないお前なんか、どういふことかわかりはしない！ でも、いい？ もう春なのよ！ それなのに、お前は私から奪おうとする——（森の縁の方へ目を向けながら）生きながらえて自分には感じる力があるなんてわかるのも困るだけというようにながらも、いずれは胸の中に埋もれていくだろうとせっかく思わせてくれたものを。お前は海よりも残酷だわ！ 「見たいものとならんで、まぎれもないほんとうのことが他にもいろいろある」だって？ 外っ側、よね。春だともわからない春がなん回もめぐって来るのよね。（もう自分のことばが心から信じられないのを憤るかのように）外っ側の他に、私になにかあるというの？ お前にとっても同じよ。望みのものを失った後に、なにかが見つけられたとでも言うの？

アリー・メイヨー：見つけたのよ、これはわかっていると今なら思えることを。命の縁——私の後に来る命を抑えて——

（パトリック夫人の方へかすかな身振りをする）

パトリック夫人：（後じさりをして）今の自分を命なんて呼ぶの？ （声をたてて笑う）砂の中に生えている汚い草に負けないほど惨めじゃないの！

アリー・メイヨー：（声をひそめ、美しさを慈しむように語るもののように）

汚い、ねえ！

パトリック夫人：(熱っぽく) 私には人生経験がある。そのとおりだわ。お前は、ここの岬みたい。海に細く突き出た陸地、命とは縁のない陸^{おか}。

アリー・メイヨー：陸を遠く離れた寄港地。(腕を上げる。慈しむものにまわすかのように腕を曲げる) 包み込み、嵐から守ってあげる陸^{おか}。

パトリック夫人：(海に直面し、他のものをすべて閉め出すものを諾うかのよう)に) 外海。外の浜。砂丘——命とは縁のない陸^{おか}。

アリー・メイヨー：外海、外の浜、むかしは船だった森で黒々としている——砂丘、命とは縁のない奇妙な陸^{おか}——森、町、そして港。戦線だ！ 外側と面と向って——自分になることは絶対にないもののために闘う、いじましく、すぎだらけの戦線。援軍が望めない戦線。勇敢な命の守り。

パトリック夫人：負けるわ。

アリー・メイヨー：勝つんだよ。

パトリック夫人：出しゃばる命は埋められてしまう。

アリー・メイヨー：だから、埋められた命の上に命が育ち、覆いつくすんだ！ (ことばの高みに引き上げられる、ついで、単純な真実を気持ちを込めて語るもののように) きっとそうなる。そして、春になったことを進んで知ろうとするような春が、幾度も、巡ってくる。

(隊長とブラッドフォードが砂の吹きだまりの後ろに登場。担架を運んでいる。二人を避けようと、パトリック夫人は奥へと歩み入る。アリー・メイヨーは自分の角にちぢこまる。男たちは入ってきて、閉じた戸口を開け、死体を残しておいた部屋に入る。しばらくして、大戸の外に彼らの姿が見える。死体を運び去るところである。パトリック夫人は彼らを下手から**見守る。)

パトリック夫人：(苦々しく、昂揚して) 救命員だって？ (アリー・メイヨーにむかって) お前たちが救命員！？ 「外側に立ち向かう」だって？ 立ち向かう——(しかし、二度目はからかい口調では口にできず、言っているうちに、意味合いがいくらか心にしみ、立ち上がる。自らも道に迷い、命の脅威の中に手探りで歩み入りながら) 外側に直面するんだわ！

(心の中に膨らんで行くのに合わせ、ゆっくりと幕)

* Susan Glaspell, “The Outside” は 1917 年 12 月 28 日に The Playwrights’ Theatre で初演され、作者 Glaspell 自身も出演し、Allie Mayo 役を演じた。

** Cambridge University Press 版, The Project Gutenberg EBook of Plays, by Susan Glaspell のどちらによっても, “from sight” となっているが, “from right” と判断した。